

聖カスバートの死後奇蹟

水 島 ヒロミ

「聖十字架の破片ならば、別の教会でも、たくさん見てきた。それらがみな本物ならば、われらの主は二本の交差した木片に打ちつけられたのではなく、ひと山の森の材木を使ってはりつけになったことになるだろう。」(『薔薇の名前』より)⁽¹⁾

はじめに ー聖遺物崇拝ー

それぞれの教会が、保有する聖遺物の正当性を主張すること、これは確かに中世ヨーロッパを特徴づける現象の一つである。それでは聖遺物の有無は、中世キリスト教社会において一体どのような意味を持っていたのだろうか。またこの時代、いわゆる神への仲介者である聖人の数は増加の一途をたどる。キリストの聖遺物に限らず、聖人の遺体、その所持品、居住場所、さらには聖人の触れた事物に対してさえも人々は強い関心を寄せた。特に11、12世紀には、聖人に関する文書、奇蹟録、墓所、

教会堂の急激な増加が確認されている。このことは、中世初期までにその位置づけが定まった主要な聖人に限らず、ヨーロッパ各地の地域性と結びついた、それぞれの地方特有の聖人たちについても当てはまる。

聖マルティヌスは、早くからガリアを中心にヨーロッパの広い範囲で信仰された聖人だが、フランス、ノアーン=ヴィックのサン・マルタンに残るロマネスクの壁画には、かつて起きた聖マルティヌスの遺体の盗難に関する場面が含まれている。(図1、2) 6世紀のトゥールのグレゴリウスによれば、聖マルティヌスがカンドという場所で死んだ時、ポワティエとトゥールの人々は、彼の遺体を聖遺物とするべく、遺体をめぐって争った。両者が口論するうちに夜が来た。扉に鍵が掛けられた。遺体を間に両者は対峙した。ポワティエ側が、夜明けとともに力づくで奪おうと様子をうかがっていたが、真夜中、彼らが睡魔におそわれたそのすきをついて、トゥール側



図1 ヴィックのサン・マルタン教会堂壁画 (写真：筆者)



図2 ヴィックのサン・マルタン教会堂壁画 (写真：筆者)

の人々は窓から遺体を出し、外で待ちかまえていた人々がそれを受け取った。壁画にはまさにこの出来事が描かれている。結局遺体はトゥールの人々とともに船でヴィエンヌ川を下り、ロワール川をさかのぼり、トゥールに運ばれたという。4世紀末の出来事が、6世紀に文字記録となって後世に伝えられた。そしてさらに12世紀に聖マルティヌスの他のエピソードを差し置いて、この出来事が壁画の一場面として内陣に近い位置に描かれた、ということなのである。⁽²⁾

聖マルティヌスに限らず、盗難事件も含め、聖遺物のたどった「数奇な運命」に関する文字記録は数多い。しかし、このような状況が視覚的に表され、現存する例は多くない。この教会堂の壁画サイクルの中で比較的等閑視されてきたこの場面を、この教会堂の壁画全体のコンテキストにおいて読み解くには、この地域における聖マルティヌスへの崇敬が、この時期どのような形をとっていたのか、がより明らかにされる必要があるだろう。

聖人伝テキストは、このような聖遺物崇拝の範疇にある。比較的早い時代に書かれたテキストが、装いも新たに別のテキストを伴って挿絵入り写本という形で登場する例は、やはり11、12世紀に集中する。例えば1071年頃制作された『聖ベネディクト読誦集』（ヴァティカン図書館ラテン語1202番写本）は典礼用の読誦集という形をとりながら、テキストとしては聖ベネディクトゥス（大グレゴリウスによる『対話篇』第2章）、聖マウルス（グランフュー修道院長オドー著『聖マウルス伝』）、聖スコラスティカ（アルベリクス著『聖スコラスティカ伝』）の聖人伝を含み、聖ベネディクトゥス伝と聖マウルス伝に関しては挿絵を伴っている。この写本の制作は、モンテ・カッシーノ修道院長デジデリウスが遂行した、いわば戦略的なプロジェクトの一つと考えられている。聖ベネディクトゥスの遺体は、当時すでにベネディクト会修道会発祥の地、モンテ・カッシーノにはなく、ランゴバルドの進入を避け、フランス中央部に位置するフルーリ修道院に移されたとみなされていた。B・アブ＝エル＝ハジが、その冒頭ページの挿絵（図3）を例として示唆するように、修道院長デジデリウスは、聖ベネディクトゥスの遺体を持たない修道院に、その正統性を主張する時



図3 「聖ベネディクト読誦集」 f. 2r. (写真：岩波書店)

の根拠の一つとなりうる、この写本を制作させたのだと考えることができる。この献呈図には、再建された新しい修道院教会堂などの建物、各地から集められた書物、そして所領の数々が描かれている。⁽³⁾

聖遺物や聖人に関する研究は、中世キリスト教社会の様々な側面を照らし出し始めている。本稿では、以下、聖人と修道院、そしてまた写本制作との関係を念頭におき、『聖カスバート伝』の一写本について、そのテキストの歴史的な位置づけを試みる。

I 聖人伝テキスト

一般に聖人伝テキストは、キリスト伝同様、生まれてからその死に至るまでの、そしてその死後も起こり続ける奇蹟の記録が主体となっている。しかしここでいう「記録」は歴史的な正確さを意味しないし、私たちが今日奇蹟とは考えにくい出来事も当然含まれている。本稿で論じる、イギリス北部、ノーサンブリアの聖人、聖カスバ

ート (?-687) について書かれた『聖カスバート伝』には、空の生き物、海の生き物に限らず、海さえもが聖人を助けた話として、次のような「奇蹟」が述べられている。「ある時、聖カスバートは修道院に小さいながら生活に必要な小屋を建てようと考えた。それが建てられる場所は、海辺の、果てることなくうち寄せる波でえぐられた岩場だったので、深い岩の裂け目の上に床張りする必要がある。裂け目の幅に合わせるには、12フィートの長さのものが必要だった。そこで彼のもとを訪れた修道士たちに、彼らがまた来る時に、12フィートの長さの木材を持ってきてくれるよう頼んだ。彼らは快くこの依頼を引き受けたが、しかし、彼らが聖カスバートの祝福を受けて帰ると、彼の依頼を失念してしまった。約束の日、彼らが聖人のもとに戻った時、彼らは頼まれたものを持参していなかった。・・・中略・・・『私があなたがたに持ってきてくれるよう頼んだ木材はどこにあるのですか』と彼は言った。・・・中略・・・しかし、この心篤き人は彼らを優しい言葉でなぐさめ、次の朝まで島にとどまって休むように言った。彼はこうも言ったのである、『私は神が私の願いと困窮を忘れないでくださると信じている』。彼らが言われた通り島にとどまり、朝起きてみると、夜の満ち潮が必要な長さの木材を運んできており、まさに納まるべきその場所にそれは置かれていた。」(ベータによる『聖カスバート伝』XXI章「いかに海が彼(聖カスバート)の困窮に対して奉仕したか」から)⁽⁴⁾

テキストはさらに、この「奇蹟」に従順を説く教訓的意味付けをしている。しかし、この教訓的意味付けを離れて、海が運んできた木材という点から考えると、潮流で説明のつく出来事だったのではないのか。「奇蹟の実体は、物語の理解や解釈にある」とみなさなければならないことになる。⁽⁵⁾

II 『聖カスバート伝』写本(O. U. C. MS165)

連続する挿絵を伴った『聖カスバート伝』写本は、1100年頃と1200年頃制作されたと推定される2点が現存する。イングランドにおける聖人伝テキスト自体の数に比べれば、連続する聖人伝挿絵を伴った写本数は決して多く



図4 オックスフォード、ユニヴァーシティ・カレッジ165番写本、p. 65 (写真: Courtesy of the Master and Fellows of University College, Oxford)

ない。にもかかわらず、聖カスバートの場合は、二度、挿絵入り写本が制作された。

12世紀初めの写本は、「オックスフォード、ユニヴァーシティ・カレッジ、165番写本」と呼ばれており、現在ボドリアン図書館に保管が委託されている。⁽⁶⁾

この写本のテキストの大部分はベータによる散文形式の『聖カスバート伝』であり、下記のテキストのうち、1章から46章までを占める。テキストの各章の冒頭には、ここでは紙面に合わせ簡略化してテーマを示しているが、本来はそれぞれの内容に合わせてタイトルが朱書きされている。冒頭の挿絵とイニシアルは念入りに彩色がほどこされているが、後のページになるほど挿絵は簡略化され、多色インクを使った線描によって描かれている。挿絵の描かれた場所は、各章ごとのタイトルと本文との間に設けられた横長の空間である。(ただしスペースが限られる場合には、タイトルが挿絵の後になることもある。)線描画の挿絵は、これ以前のアングロ＝サクソン挿絵の表現方法を踏襲しており、写本は比較的小型である。⁽⁷⁾この写本のテキストと挿絵の構成は次の通りである。

(1) 写本の内容構成

挿絵の描かれたページ / (テキストの章) / テーマ

ii (序文) 著作中のベータと書物の贈呈

1 イニシアル D

8 (1) 遊びに興じ、子供にたしなめられる

9 イニシアル P

- 12(2) 天使の助力による聖カスバートの膝の治癒
- 14(3) 彼の祈りで風向きが変わり、筏は岸へ辿り着く
- 18(4) 羊飼いの中で、昇天するアイダンの魂を見る
- 20(5) 旅の途中、馬が食料を見出す
- 23(6) メルローズ到着、ボイシルBoisilに迎えられる
- 26(7) 天使をもてなし、後に三個のパンを見出す
- 29(8) カスバート病に罹る、ボイシルの死と預言
- 33(9) 説教するカスバート
- 35(10) 海中での祈りと海獣による奉仕、修道士の治癒
- 38(11) 三切れのイルカの肉を見出す
- 41(12) 旅の途中、驚によって食料を得る
- 43(13) 説教中の幻の火事
- 45(14) 祈りによる火事の鎮火
- 47(15) 荘園の管理人の妻から悪霊を追い出す
- 50(16) リンディスファーンでのカスバート
- 55(17) 悪霊を追い出し、ファーン島に庵を作る
- 58(18) 岩から水が湧き出る
- 61(19) 種を蒔き、鳥を追い払う
- 63(20) 屋根の藁を抜くカラス、叱責されラードを贈る
- 65(21) 波が運んできた木材 (図4)
- 67(22) 訪問者への教唆
- 69(23) カスバートの帯による女子修道院長と一修道女の治癒
- 72(24) エグフリスEcgfrith王の寿命とカスバートの司教職に関する預言
- 76(25) 司教カスバート、従士の召使いを治す
- 78(26) 司教としてのカスバート
- 79(27) カーライルの泉でエグフリスの戦死を知る
- 84(28) ヘレベルトHereberhtへ自らの死を予告、ヘレベルトの死
- 86(29) 聖水による従士の妻の治癒
- 88(30) 聖油による少女の頭痛の治癒
- 89(31) カスバートの祝福したパンによる治癒
- 91(32) 若者の復活
- 92(33) 母親の腕の中で死にかけていた少年の治癒
- 94(34) 木から落ちて死亡した男の魂を食事中に見る
- 97(35) 水がワインに変じる
- 98(36) 嵐によって足止めされた不従順な修道士たち
- 101(37) 病に罹る、埋葬についての指示
- 108(38) 病にあつて尚、病人を治す
- 110(39) ファーン島でのカスバートの死 (687年)
- 113(40) 遺体はリンディスファーンへ
- 115(41) カスバートの体を洗った水による少年の治癒
- 118(42) 1年後も損なわれていなかった遺体 (698年)
- 121(43) 司教イードベルトEadberhtの埋葬
- 122(44) ある病人が墓所で祈り、癒される
- 124(45) カスバートの靴が麻痺を治す
- 126(46) 庵の隙間をふさぐ仔牛の皮が顔の腫れを治す
- 130(47) 墓で祈った修道士の治癒 (HE)
- 132(48) カスバートの髪が目癒す (HE)
- 135(49) 巡礼姿のカスバート、アルフレッド大王のもとに現れる (PB1)
- 143(50) 遺体を載せた船と血に変わった大波 (PB2)
- 149(51) 罵りながら教会堂に侵入した北方人の死 (PB3)
- 153(52) 大地に飲み込まれるスコットランド軍 (PB4)
- 157(53) 教会へ逃げ込んだ囚人、その追跡者の死亡 (PB5)
- 159(54) 満潮時に海が割れる、征服王からの逃亡 (PB6) (1069年)
- 163(55) ノルマン兵士の盗みと死 (PB7)

テキストは168ページまで。170ページ以降は聖カスバートへの賛歌が含まれている。

(2) テクストー死後奇蹟一

47章と48章はベータの『イギリス教会史』からの抜粋であり (HEで表示)、かなり早い時期からベータの『聖カスバート伝』とセットになっていた。⁽⁸⁾さらに49章から52章までは、いわゆる『聖カスバートの歴史』Historia de sancto Cuthbertoと呼ばれる文書に含まれるテキストに基づいて書かれたとみなされており、これに53章から55章をあわせた7奇蹟 (PBで表示) がベータ後の奇蹟の最初のグループを形成すると考えられている⁽⁹⁾。49章ではすでにイングランドはデーン人に侵入を許しており、さらに50章で、共同体の修道士たちは聖カスバートの遺体とともにエディンバラとニューカッスルのほぼ中間に位置するリンディスファーンを去り、各地をさまよった末、

ニューカッスルとダーラムの間に位置するチェスター・ル・ストリートChester-le-Streetへ、そして最終的にはダーラムへ、落ち着いたことが分かる。(一時、54章にあるように、侵攻してくるノルマン軍を避け、1069年から1070年までリンディスファーンに避難している。)そして55章のテーマにみるように、ここではすでにアングロ＝ノルマンの時代に入っている。

B・アブ＝エル＝ハジの指摘通り、ベータダが書き残した死後の奇蹟(41-48章)とベータダ後の奇蹟(PB1-7)の内容には大きな変化がある。ベータダ後の奇蹟に着目してみよう⁽¹⁰⁾。

49章/PB1は、デーン人に追いつめられ、沼地に潜んでいたアルフレッド大王(在位871-899)のもとに巡礼(実は聖カスバート)が現れる話である。ある日彼は彼の妻と一人の従者を除く一族全員を釣りに行かせる。食料が底をついていたのである。すると一人の巡礼が現れ、彼のところへきて食物を乞うた。一日分の食料としてひとかたまりのパンとわずかなワインしか残っていないことを従者から知らされると、アルフレッド大王は神に感謝し、半分ずつ彼に分け与えるよう命じた。従者は忠実に言われた通り食物を分け与えると、巡礼からの主人に対する感謝の言葉を伝えに行き、また食物のところへ戻った。見ると、パンとワインは全く残っており、巡礼の姿はなかった。どこへ行ってしまったのかも分からなかった。この後、釣りに出かけた人々は船に魚を満載して戻ってくる。そしてその夜アルフレッド大王が眠っていると、聖カスバートが現れ、巡礼が聖カスバートであったことと、彼の戦いにおける勝利が告げられるのであった。これと同様に、聖人の慈悲をテーマとするのは、後述の53章/PB5である。

50章/PB2では、デーン人の脅威に聖カスバートの遺体をアイルランドへ運ぼうとしたところ、嵐と波によって阻止されたことが述べられている。司教イールドゥルフEardulfとカーライルの修道院長イードレッドEadredが、聖カスバートの遺体を船に乗せ、海を越えてアイルランドへ運ぼうとした。聖人に付き従ってきた人々は、彼らの守護者が連れ去られることを嘆き悲しみ、岸边に立ちつくした。彼らを哀れんだ聖カスバートによって恐

ろしい嵐が海に起こり、3つの大波が船に落ちかかると、水は血に変わった。船は岸へ戻り、遺体はクレアクCrayke(北部ヨークシャー)というところへ運ばれ、さらにチェスター・ル・ストリートからリポンを経てダーラムへと移された。

51章/PB3は、土地の所有権をめぐる懲罰の物語である。侵入したデーン人レグナルドRegnaldは、スクラSculaとオナラフバルドOnalafbaldに征服した聖カスバートの所領地を分け与えた。オナラフバルドはある日聖カスバートの教会堂に入った。そこにはカットハードCutheardや他の共同体のメンバーが立っていた。「私に毎日脅しをかけてくるが、死人のカスバートが私に対して一体何ができるとおまえたちは言うのか。私の神々に誓って、私はその死人とおまえたちにとって最も嫌悪すべきものとなる。いかなる者も私にはむかうことなどできないことを思い知るがいい。」この言葉に司教と共同体のメンバーは地に伏し、神と聖カスバートにその傲慢なおどしを封じてくれるよう祈った。オナラフバルドは偉そうに教会堂から出ていこうとしたが、片足を一步外に踏み出したところで全く動けなくなった。目は血走り、血の気は失せ、四肢は苦痛がとまらず、ついには聖カスバートを讃えると息絶えた。その場に立ちすくんだ彼は結局命を落とし、聖カスバートは彼の土地と諸権利を取り戻したのである。

52章/PB4も懲罰がテーマである。侵入してきたスコットランド軍が聖カスバートの所領とリンディスファーン修道院をかつてないほど蹂躪し、これに対抗しようとしたグスレッドGuthredがわずかな手勢で急行したが、スコットランド軍の数の多さに恐怖し、退却も前進もできなくなった。聖カスバートがグスレッドの夢に現れ、敵は神の目から見れば死んでいるのだ、と喪失していた戦意を奮い立たせた。翌朝、彼の言うとおおり、スコットランド軍は最初の衝突の時、大地に捕まり飲み込まれてしまった、という。

53章/PB5、エドワード懺悔王の治下、トスティグTostigがノーサンブリア伯であった時、ダーラムで盗人が捕らえられた。強盗殺人に放火の罪で足かせをつけられた。彼の改悛と、聖人の助けによって足かせから自由

になり、教会堂に逃げ込んで扉を閉め、かんぬきをかけた。トスティグの供の一人でバルクウィスBarcwithという名前の男が彼をとらえようと教会堂に駆けつけ、「なぜ入り口を打ち破らない？」と問うた。その彼の頭上からあたかも矢が落ちて頭から心臓まで貫いたかのように、彼は地面に倒れ、うめき声をあげ、歯がみし、転がった。彼は一言も発しないまま3日間苦しんで死んだ。埋葬した墓からは半年間悪臭が吹き上がった。トスティグはそれ以上盗人に追求の手は差し向けなかった。

54章/PB6は、1069年に起きた、ノーサンブリア伯のノルマン人、ロバート (Robert de Comines) 殺害に端を発する物語である。殺害事件のあとウィリアム征服王はイングランド北部に対して大遠征を行った。司教エゼルウィンAethelwineと共同体メンバーは聖人の遺体とともにリンディスファーンに逃亡。満潮時にも関わらず、足をぬらさず海を渡ることができたという。

55章/PB7も懲罰を扱っている。ダーラムの城に駐留していたノルマン人兵士が教会堂の中で夜を過ごし、目星をつけていた宝物を盗み出した。その後すぐ彼は高熱に犯され、彼の過ちを告白しながら苦しんで死んでしまった。

このようにベアダ後に書かれた奇蹟では、聖カスバートの所領地とその諸権利を蹂躪するものへの懲罰という性格が強くなっている。死後奇蹟において懲罰に関する奇蹟が増えるという傾向は、聖カスバートの場合に限らない⁽¹¹⁾。とはいえイングランドの場合は、ノルマン人による征服という政治的事件が、聖人伝テキストの成立に大きく関わっている。

しかもB・コルグレイヴは、ベアダの『聖カスバート伝』テキストに加えて、ベアダ後の聖カスバート関連の奇蹟テキストを含む写本27点を調査しているが、連続する挿絵を含む写本は、彼の写本リスト中やはり上記の2点にすぎない。また、オックスフォード165番写本とテキストの構成が同一の写本の存在も確認されていない。オックスフォード本以後に制作された大英図書館本(Yates Thompson 26もしくはAdditional 39943)は、ベアダ後の奇蹟に関してはテキストだけで挿絵を含まない。つまり、ベアダ後の奇蹟に挿絵が描かれた写本はオックスフ

ード165番写本のみ、ということになる。

III ダーラム (Durham)

(1) ダーラムへ

ベアダ後の7篇の奇蹟は、懲罰や遺体の移動、つまり敵対者からの共同体の保護、そして共同体の連続性を示す物語でもある。875年から10世紀終わりにダーラムに落ち着くまで、聖カスバートの遺体は移動を重ねた。残されている文字記録はわずかだが、聖カスバートの遺体は次のような経路でダーラムまでかなりの距離を移動したとみなされている。

9世紀前半 一時ノーサムNortham (スコットランドとの境界地) に移動。のちリンディスファーンに戻る？

875年 リンディスファーンから移動。(7年間?各地をさまよう) 50章/PB2の事件

ウィトホーンWhithorn (スコットランド南部) 経由でクレアクからチェスター・ル・ストリートへ。

995年 リポン (北部ヨークシャー) に一時避難の後、ダーラムへ。

記録に残されたこの移動は、果たしてその時の偶然に任せた単なる逃避行にすぎないのか、というのがD・ロラソンの疑問である⁽¹²⁾。これらの地名は、共同体の所領地の場所を指示し、移動自体は各所領地と聖人との結びつきを確認するためのものとみなせるのではないかと彼は考えている。確かに、所領地に関する関心の高さは51章/PB3に顕著である。もしそうなら、彼の述べる通り、遺体を持ち歩き、彼らの「中心」を明確にすることで、有形の遺体は、聖カスバートの共同体の存続と土地の既得権に関する、そしておそらくもはや修道士とは言えないが、聖カスバートの遺体を守っていた人々、つまり「聖カスバートの人々」と表記された人々の、正統性についての可視的な象徴として機能したのだろう。この「聖カスバートの人々」という言葉は51章/PB3の中で

使われている⁽¹³⁾。

さて49章/PB1-52章/PB4までが『聖カスバートの歴史』に記録されていた奇蹟と共通することはすでに述べた。現在まで何度も注意が喚起されているこの文書のサブ・タイトルを述べておこう。「彼の古き時代より現在までの所領の場所と領域についての記録」がそれである⁽¹⁴⁾。

(2) ダーラムで

共同体の守護者としての、その所領地の受容者としての聖人の遺物が存在すること、そのことが共同体が古くから存続していたことの根拠になる。ノルマン人の到来によって、司教座修道院という形態をとるアングロ=サクソン教会は新たな局面を迎えた。一方、大陸から送り込まれたノルマン人聖職者たちは、アングロ=サクソンの古くからの聖人たちと向かい合わなければならなくなった。かつてD・ノウルズは、アングロ=サクソン古来の聖人に対するノルマン人の対応を冷ややかなものとみなし、次のように記している。「ノルマン人修道院長たちは、しばしば古いイングランドの聖人たちに対して無礼な態度をとり、修道士たちの感情を逆なでした。セント・オールバンズのポールはしくじった。彼は先人たちの墓をなおざりにして、彼らのことを無教養なあほうどもと言ってしまった。アビndonのアセレルムはやはり同じような雑言を吐き、アングロ=サクソンは田舎者だとして聖エセルワールドや聖エドモンドの祝祭日を祝う事を拒絶した。聖カスバートの偉大な名前さえノルマン人の懐疑主義に対する証明とはならなかった⁽¹⁵⁾。」このようなD・ノウルズの考え方は、S・J・リドヤードやD・ロラソンらによって現在では修正されつつある。ノルマン人にとっては、聖人の聖性よりも、聖人であることの由来や遺物を検証し、それに対してどう対応すれば事態を自分たちにとって有利な方向へ展開できるのかということの方が重要なことであった、とみなされている。確かに聖カスバートの場合、その遺体の実在と状態（埋葬された時のままの姿で全く損なわれていないかどうか）に関して、1104年の移葬translatioの際には、当時の司教ラヌルフ=フランバルドRanulf Flambard (1099-1128 : 96

-99年、司教職は空位)や近隣の小修道院長らを巻き込んで疑いが起こり、棺が開けられて確かめられるという事態に至った。しかしこれは聖カスバートの聖性を疑うという性質のものではなかった⁽¹⁶⁾。

1070年にノルマンディーのカーン修道院からカンタベリーに送り込まれたランフランクは、クライスト・チャーチの図書館に聖人伝や教訓的な物語の多いことを問題視し、神学上の基本的なラテン語文献—具体的にはヒエロニムス、アウグスティヌス、アンブロジウス、グレゴリウス、そしてベダなどの教父著作—をそろえる事に力を入れたと言われている。しかしその一方で、ランフランクの伝記の中で、エドマーは、彼がカンタベリーの聖エルフィージュElphege(Aelfheah)に疑問を抱き、その聖人伝が書かれるよう命じたと述べている⁽¹⁷⁾。

ノーサンブリアという地域は、その性格から、聖カスバートという聖人に対して、より慎重な対応をノルマン人に要求したと見られている。ベダ後の奇蹟伝に述べられている通り、この地域は、デーン人、ノルマン人に加え、スコットランド人に侵入を許している。また、ノルマン人到来以前にこの地域を支配したモーカーは、もともとウェセックス伯ゴドウィンに対して協力的な存在ではなく、また、ノルマン人に対しても不穏な動きを見せ、この地域での反乱は後を絶たなかった。前述の、征服王ウィリアムによって送り込まれたノーサンブリア伯ロバートの殺害事件に端を発する、征服王ウィリアムの北部遠征によってモーカーは囚われの身となる。しかし、この後も反乱は続発し、ロートリンゲンから呼ばれ、ダーラムの司教に着任したヴァルカー(Walcher : 1070-80)が1080年に殺害されている。そしてこのヴァルカーの時代に、荒廃したまま放置されていたジャロウとウェアマスにおいて、アルドウィンAldwinによる修道院の再生が始められていた。ヴァルカーはダーラムに修道士を招き入れたいと考えていたようだが、死の4年前からノーサンブリア伯にも任命され、結局、ニューカッスル近くのゲーツヘッドGatesheadの反乱で命を落とした。その後を引き継いだのがノルマン人司教ウィリアム(William of St. Calais 1080-96ただし叙任は1081年)である。司教ウィリアムは聖カスバートやリンディスファーンについて

の由来や情報をできるだけ集めたと言われる⁽¹⁸⁾。さらにローマ教皇とランフランクの賛同を得て、1083年にはウエアマスとジャロウからアルドウィンを含む23人のベネディクト会修道士を呼び寄せ、修道士のための領地を譲渡し、司教の領地とはっきり区別したという。もっとも彼自身が崇敬の対象とした聖人は、彼のいた修道院と関連する聖カリレフスCarileffus (Calais) であったふしがあり、彼は政治的な思惑から聖カスバートに関心を示したのではないか、と今日では考えられている。彼は1088年の反逆事件に連座してウィリアム・ルフス（ウィリアム二世）に一時追放されるが、1091年秋にダーラムに戻ると、1093年には新しいノルマン様式の大聖堂建設に着手するのである。そして1104年、完成した内陣の部分へ聖カスバートの遺体は移葬されることになる。



図5 オックスフォード、ユニヴァーシティ・カレッジ165番写本、p. ii
(写真：Courtesy of the Master and Fellows of University College, Oxford)

IV おわりに

ふたたび『聖カスバート伝』写本 (O. U. C. MS165)

かつて、D・H・ファーマーは、この写本をアングロ＝サクソンの王家の血筋であるスコットランド王妃マーガレットと結びつけようと試みた⁽¹⁹⁾。サウスンプトン近郊のサウスウィックにある小修道院に由来するとみなされたこの写本の制作地は、ダーラムと考えられているが、それは主に写本学や書体学の成果によるところが大きい⁽²⁰⁾。D・H・ファーマーの着眼点は、この写本の大きさである。教会堂の内部で使われる典礼用の大型写本と比べるとはるかに小さい。確かに個人用の書物として作られた可能性が高いのである。しかし彼の主張通り王妃

マーガレットの個人用の書物とすれば、彼女が死亡した1093年という年代が、制作年代の決定に影響をあたえることになる。

この写本の献呈図（図5）を見てみよう。枠で囲まれた縦長の空間を二段に分け、上には著作中のベータ、下には出来上がった書物を贈呈するベータが描かれている。献呈図ではあるけれども、同時に序文の挿絵でもあったら、描かれているのは、司教イードフリスとリンディスファーンの修道士たちに贈呈するベータの姿ということになる。しかしそれを明らかにするような文字表現や特徴は示されていない。挿絵が序文のテキストの前に置かれているために、例えば聖カスバートに対する献呈とも、12世紀のダーラムの修道士と修道院長に対する贈呈とも解釈できる多義性をもっている。

司教ウィリアムは行政手腕をかわれてダーラムの司教に着任した。追放されていた時期も含め、ローマ教皇のもとへ赴いた時期や、ドームズデイ・ブックに関与していた時期を合わせると、ダーラム不在の期間が長かった。彼はむしろ国王の行政官であり、ダーラムでの実務は副修道院長のトゥルゴTurgot（1087年？－1109年）が執り行ったと考えられている。彼はアルドウィンの死後を引き継ぎ、1093年にはarchdeaconの地位を与えられている。この写本は、彼のもとで、聖カスバートの遺体を中心に修道院としての形が整えられていく過程で、たとえば、大英図書館にあるプルデンティウスの『プシコマキア』写本（Ms. Cotton Cleopatra C.VIII）のような、修道士のための教育用書物として制作された写本の一冊なのではないかと思われる。

編集したテキストは、少なくとも修道士に、聖カスバートという聖人を模範として教訓的な教えを示す他、ダーラムが聖カスバートの遺体を持つことの「正統性」を証明する。さらに、編集したテキストに一貫した挿絵がつけられることによって、テキスト全体は視覚的な一貫性を獲得した一冊の書物になりうる。そしてそれはまた次世代に引き継がれることになる。

聖遺物の外延として広がりを示すのは、聖人伝テキストだけではない。視覚的でこそなくても、同時期のダーラムのシメオン等に帰せられる年代記のような文字記録

もこの広がりの中にある、と言えるだろう⁽²¹⁾。

註

- (1) U・エーコ著『薔薇の名前』河島英昭訳 東京創元社 1990年 下巻 p.266.
- (2) Gregory of Tours, *The History of Franks*, trans. O. M. Dalton, Oxford, 1927, vol. II, p.29.
M. Kupfer, *Romanesque Wall Painting in Central France*, Yale University Press, New Haven and London 1993, pp.123ff. cf. エミール・マール著『ロマネスクの図像学』（上・下）田中仁彦他訳 国書刊行会 1996年 上巻、第6章。
- (3) 『聖ベネディクト読誦集』（ファクシミリ版）解説：B・ブレンク 岩波書店 1983年。B. Abou-El-Haj, *The Medieval Cult of Saints : Formation and Transformations*, Cambridge, 1994, p.37, cf. B. Brenk, *Das Lektionar des Desiderius von Montecassino : in Meisterwerk italienischer Buchmalerei des 11 Jahrhunderts*, Zürich, 1987.
- (4) Bede's Prose Life of Saint Cuthbert, *Two Lives of Saint Cuthbert*, ed. & trans. B. Corgrave, Cambridge University Press, (1940) 1985, pp. 225-227.

聖カスバートに関しては初期の物語が4つある。

その一つは、散文で書かれた『聖カスバート伝』であり、699年から705年の間に、リンディスファーンの一修道士によって書かれたと考えられている。これに基づいて書かれたのが、ベータによる韻文形式（716年までに）と散文形式（721年までに）の『聖カスバート伝』である。さらに731年頃に書かれた、ベータの『イギリス教会史』には、6章にわたってこの聖人への言及が見られる（26、27、28、29、30、31章）。ベータが『聖カスバート伝』を書いた理由としては、リポンの修道院で『ウィルフリッド伝』が最初の『聖カスバート伝』の形式に従って書かれたために、これに対抗したのではないかと考えられている。

ヴァイキングによるアイスランド植民の貴重な資料として知られる『植民の書』には、入植地を決める際、それが漂着した地に入植することを誓いながら予言に従って高座柱を海中に投じたと述べられているという。ここで引用した奇蹟は、793年にヴァイキングがリンディスファーンを急襲し、略奪に及んだ『アングロ＝サクソン年代記』に記された事件を予見させるような話でもある。B・アルムグレン編『ヴァイキングの歴史』蔵持不三也訳 原書房 1990年 p.135他。

- (5) 渡邊昌美著『中世の奇蹟と幻想』岩波書店 1989年 p.11.

『聖カスバート伝』を含む聖人伝テキストに関してはB. Colgrave, "The Earliest Saint Lives written in England," *Proceedings of the British Academy*, XLIV, 1958, pp.35-60. 『聖カスバート伝』が他の聖人伝同様、4世紀のアタナシウスの『聖アントニウス伝』（エウグリウス訳）や、5世紀のスルピキウス・セウェルスの『聖マルティヌス伝』、6世紀の大グレゴリウスによる『対話篇』などのテキストの影響を強く受けていることは明らかにされている。『対話篇』と『アントニウス伝』については以下に日本語訳がある。『対話篇』は上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成 5 後

期ラテン教父』平凡社 1993年 pp.441-504. 『アントニウス伝』は上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』平凡社 1995年 pp.767-847. 尚、G. Bonner, “Saint Cuthbert-Soul Friend,” D. Rollason (ed.), *Cuthbert, Saint & Patron*, Durham, 1987, p.26に『アントニウス伝』からの借用と思われる『聖カスバート伝』の一部分が指摘されている。『対話篇』や『聖マルティヌス伝』との関連については、D. Rollason, *Saints and Relics in Anglo-Saxon England*, Oxford, 1989, pp.63-75.

聖人伝テキストに特有の、パターン性や反復性、借用という性格は、このテキストが「意外な結末におわる物語」を意図して書かれたのではないことを示している。かつてトゥールのグレゴリウスは彼の著書、*Vita Patrum*の副題をLiber de vita quorundam feliciosorumとつけたが、vitaと単数にしたことについて、その序文で次のように述べている。「・・・そして、私たちは聖人の生涯というのを複数にすべきか単数にすべきか、という質問をする人がいる。・・・中略・・・明らかに単数の方がよい。彼ら（聖人）の功績や奇蹟は様々であるけれども、この世界で一つのものが彼らをはぐくんだのだから。」A. G. Elliott, *Roads to Paradise*, Hanover and London, 1987. p.5-6. cf. C. Hahn, “Picturing the Text : Narrative in the Life of the Saints,” *Art History*, vol.13, 1990, pp.1-33. 特にp. 6. すべての聖人伝はキリストのもとへ収束していくのであるからということなのである。そしてまた聖人伝は一つの模範であって、教導的目的を担っている。A・G・エリオットはこうも述べている。「読者はその結末をよく知っているのだから、その物語がどのように語られるのかということや、細部の細かい多様性に、より注意が向けられることになる。」A. G. Elliott, p. 8. テキストの類型と関わる聖人伝挿絵の造形上の問題点については別に稿を改めて論じる。

(6) C. M. Kauffmann, *Romanesque Manuscripts 1066-1190*, London, 1975. M. Baker, “Medieval Illustrations of Bede’s Life of St. Cuthbert,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, XLI, 1978, pp.16-49. (Appendix D : by D. H. Farmer) W. O. Hassall (ed.), *Bede’s Life of St. Cuthbert, Major Treasures in Bodleian Library*, no. 7, Oxford, 1978. (マイクロフィッシュ)

小型の聖人伝挿絵写本に関しては、F. Wormald, “Some Illustrated Lives of the Saints,” *Bulletin of the John Rylands Library*, vol.35, 1952, pp.248-66 (*Collected Writings* II, London, 1972, pp.43-56).

(7) F. Wormald, *English Drawings of the Tenth and Eleventh Centuries*, London, 1952. 様式に関してはM. Bakerの論文参照。写本の大きさは約197mm×122mm、紙葉はii + 102葉。

(8) B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede’s Ecclesiastical History of the English People*, (1969) 1981, pp.444-449. ベーダ著『イギリス教会史』長友栄三郎訳 創文社 1964年 pp.356-359.

(9) T. Arnold (ed.), *Symeonis Monachi Opera Omnia*, Rolls Series, 2 vols, 1882-5, vol. I, pp.229-61 (PB1-6の奇蹟), II, pp.333-62 (PB7の奇蹟), B. Colgrave, “The Post-Bedan Miracles and Translations of St. Cuthbert,” *The Early Cultures of*

North-west Europe, H. M. Chadwich Memorial Studies, ed. Sir C. Fox and B. Dickins, Cambridge, 1950, pp.307-32. B・コルグレイヴは21の奇蹟を紹介している。ベーダ後の奇蹟のうちこの最初の7奇蹟は1083年以降に書かれたと考えられている。この年、聖カスバートの遺体を守っていた共同体がベネディクト会修道士と置き換えられており、一方、第6の奇蹟のテキスト中にダーラムの修道士 (congregatioではなくmonachi) という記載があるため。50章のテキストと関連するシメオンのテキストに、リンディスファーンの福音書の紛失と発見についての記述が含まれている。Historia Dunelmensis Ecclesiae, T. Arnold (ed.), *Symeonis*, vol. I, pp.64-67.

『聖カスバートの歴史』に関しては、T. Johnson-South, “*The Historia de Sancto Cuthberto*” : A New Edition and Translation, with Discussions of the Surviving Manuscripts, the Text, and the Northumbrian, Ph. D. diss., Cornell University, 1990. cf. H. H. E. Craster, “The Red Book of Durham,” *English Historical Review*, XL, 1925, pp.504-532.

(10) B. Abou-El-Haj, *The Medieval Cult*, p.57, “Saint Cuthbert : The Post-Conquest Appropriation of an Anglo-Saxon Cult,” P. E. Szarmach (ed.), *Holy Men and Holy Women : Old English Prose Saints’ Lives and Their Contexts*, New York, 1996, pp.177-206.

(11) cf. P. A. Sigal, *L’homme et la miracle*, Paris, 1985, p.289.

(12) D. Rollason, “The Wanderings of St. Cuthbert,” D. Rollason (ed.), *Cuthbert, Saint & Patron*, Durham, 1987, pp.45-59. cf. E. Craster, “The Patrimony of St. Cuthbert,” *English Historical Review*, LXIX, 1954, pp.177-99.

(13) この時期ダーラムで聖カスバートの遺体を守っていたのは修道士でも、聖堂参事会員でもなかった。“congregationem, atque populum sancti Cuthberti”

(14) De Commemoratione locorum regionumque priscae possessionis a primordio usque nunc temporis

(15) D. Knowles, *The Monastic Order*, Cambridge, 1963 (1940), pp.118-9.

(16) S. J. Ridyard, “Condigna veneratio : Post-Conquest Attitudes to the Saints of the Anglo-Saxons,” *Anglo-Norman Studies*, IX 1986, p.179-206. 特に、pp.198-99. D. Rollason, *Saints and Relics*, pp.215-239. 聖カスバートの移送に関しては、C. F. Battiscomb (ed.), *The Relics of Saint Cuthbert*, Oxford, 1956, pp.55-64, 99-112. 尚、ダーラムへの他の聖人の移葬や聖遺物の移動については、D. Rollason, *Saints and Relics*, pp.212.

(17) N. Ramsay, “The Cathedral Archives and Library,” P. Collison, N. Ramsay, M. Sparks (eds.), *A History of Canterbury Cathedral*, Oxford, 1995, p.347. R. W. Southern (ed.), *The Life of St. Anselm by Eadmer*, Oxford, 1979 (1962), pp.50-54. cf. 山代宏道著『ノルマン征服と中世イングランド教会』 溪水社 1996年 p.248.

(18) 司教ウィリアムについてはH. S. Offler, “William of St. Calais’ First Norman Bishop of Durham,” *Transactions of the Architectural and Archeological Society of Durham and Northumberland*, X, 1946-53, pp.258-279. W. M. Aird, “An Absent

Friend : The Career of Bishop William of St. Calais,"D. Rollason, M. Harvey, M. Prestwith (eds.),*Anglo-Norman Durham*1093-1193, Woodbrige 1994, pp.283-297. 司教ウィリアムがダーラムに残した写本に関しては、A. Lawrence, "The Influence of Canterbury on the Collection and Production of Manuscripts at Durham in the Anglo-Norman period," *The Vanishing Past. Studies of Medieval Art, Liturgy and Metrology presented to Christopher Hohler*, 1981, pp.95-103 参照。

(19) 注6参照。

(20) cf. E. Temple, "A note on the University College of Life of St. Cuthbert," *The Bodleian Library Record* IX 1978, pp.320-322.

(21) A. Gransden, *Historical Writing in England c. 550 to c. 1307*, London, 1974, pp.114-123. D. Matthew, "Durham and the Anglo-Norman World," G. Bonner, D. Rollson, C. Stancliffe (eds.), *St Cuthbert, his cult and his community to AD1200*, Woodbrige, 1989, pp.1-22. A. J. Piper, "The Generations of Durham Monks and the Cult of St Cuthbert," G. Bonner, D. Rollson, C. Stancliffe (eds.),*St Cuthbert*, pp.437-446.

(1998. 6 . 20)